

事後評価報告書
(日本-ブラジル(CNPq)研究交流)

1. 研究課題名: バイオチャーの利用、安定性、安全性とその適応に関する日伯共同研究

2. 研究代表者名:

日本側: 九州大学大学院農学研究院 環境農学部門生産環境科学分野 教授 凌 祥之

相手側: EMBRAPA-Solos, Soil Chemistry Senior Research Etelvino Hendrique Novotny

3. 総合評価: C

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

バイオチャーに関する知見をブラジルに提供し、実験することにより、ブラジルでの研究ネットワークが拡大したことは評価に値するが、各研究グループの研究成果は、本事業が結びついたものか判断し難い。相手国との知識や情報の共有に重きを置いたため、共同で何かを研究するという視点に欠けていたと思われる。顕著な研究の発展が見られず、相手国側との共同研究に基づく論文発表・学会発表も全くないことから、研究目的である日伯間の知見と情報の共有には達していないと感じられる。一部でも、ブラジルでの共同研究によって日本側の知見の実証がなされていない点は残念である。

(2)交流活動の評価について

本事業によりブラジル側との研究交流の起点が作られ、ネットワークが形成できたことが成果と言えるが、具体的な研究課題を相手国と共同で研究し、若手育成をも含めた国際交流であったかは、本事業報告書からは読み取れない。本課題による相手側への訪問は教授クラスの研究者がほとんどであり、若手研究者の育成などの視点に欠けていたと思われる。ワークショップやセミナーなどの参加者は5~15名と少なく、一部の研究者のみで行われた模様であるが、大学院生の人材育成への貢献の視点が見られないのは残念である。

(3)その他

具体的な現場レベルでの研究技術の交換(若手の人材交流)などが含まれていたほうが良かった。また、ワークショップやセミナーなどの開催などが主目的になっており、本事業の趣旨とはやや異なると感じられた。